

水俣病経験の「翻訳」を通じたネットワークの構築 —「本願の会」メンバーのライフヒストリーをめぐる—考察—

下田 健太郎

慶應義塾大学大学院 文学研究科 後期博士課程

本発表の目的は、不知火海沿岸で水俣病の被害を生き抜いてきたある個人による水俣病経験の「翻訳」のプロセス、及びそれを通じたネットワークの構築に焦点を当て、近代の言説とせめぎ合う社会的実践の動態について考察することである。

近代の言説が「水俣病」という表象のコントロールを通じて「患者」を構築し、水俣病を過去に起こった物語の中に回収してきた一方で、多くの被害者にとって水俣病をめぐる過去は決して過ぎ去ったことではなく、現在も継続するものとして経験されており、モノや語りといった多様な媒体を用いつつその一元的な歴史化に抗し続けている。そこには患者認定や補償を前提とした「患者」として包摂されることを拒み、自律性を確保しようと試みてきた被害者たちの姿が看取できる。患者有志により 1995 年に発足した「本願の会」の活動はその一例である。彼／彼女らは、法的・経済的・医療的「救済」では癒えることのなかった心情を表現するために、水俣病の「爆心地」とされる水俣湾埋立地に自らの手で彫った石像を祀り、「いのち」や「よみがえり」を主題とする祈りの実践を展開してきた（下田 2011）。

「本願の会」の人々の実践は、多様な立ち位置の個人が交錯する場となっており、「患者」であるかどうか、あるいは「加害者」／「被害者」といった二者択一的なカテゴリーでとらえ切れるものではない、それゆえ、水俣病経験の語り直し＝「翻訳」という作業を通じて、日々つくり出され、つくり直されている個別具体的な実践に注目することが有効である（慶田 2004）。さらに、本事例において、「翻訳」という作業が新たな社会的つながりを生み出す重要な契機となってきた点も見逃せない（cf. ラトゥール 1999）。たとえば、「本願の会」のあるメンバーが人間社会の加害／被害を自然界に対する「人間の罪」という観点から「翻訳」してきたことに伴い、水俣病をめぐる既存の運動にはみられなかった新たなタイプのつながりが生み出されてきている。

本発表では、この視座に立ち、「本願の会」結成の原動力となった O 氏（男性）のライフヒストリーに光を当てる。O 氏は幼少期に父親を劇症型水俣病で亡くした経験から、その「かたき討ち」を胸に 1970～80 年代の水俣病をめぐる運動に主導的立場で関わってきた。ところが「仕組みのなかの水俣病」に限界を感じた O 氏は、1985 年に運動を離脱し、制度への働きかけに依らない独自の活動を展開してきた。発表では、フィールドワークで収集した患者運動や裁判の記録、「本願の会」発行の季刊誌、文書化された O 氏の語り、発表者による聴きとりをもとに、(1) O 氏の語りの変遷と O 氏によって制作されてきた 5 体の石像の関係性のなかに、モノを媒介としながら展開してきた水俣病経験の「翻訳」のプロセスを通時的に読み解いていく。とくに制度からの自律を希求し、壮絶な精神的葛藤の中から O 氏が見つみ出してきた「魂」、「命」、「自然」などの語彙とその構築過程に注目する。次に (2) O 氏以外の「本願の会」メンバー 2 名による石像製作と語りの実践について検討し、彼／彼女が「魂」や「命」といった語彙をそれぞれに語り直しつつ、自己を再構成してきた様相を明らかにする。その上で、(3) O 氏による水俣病経験の「翻訳」のプロセスと連動しながら生み出されてきた社会的つながりのあり方について論じる。